
仮面ライダーNEW電王～全ての時の守護者～

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーNEW電王と全ての時の守護者

【Nコード】

N8049Z

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

レッツゴー仮面ライダーを観てNEW電王が格好いいなと思い、作りました。

Times01～始まり～（前書き）

小説を作るのって…楽しいですね。

Times 01 始まり

【桐原家】

「はあゝ退屈ね…」

そう言ったのは桐原奏。きりはらかなで仮面ライダーNEW電王に変身する少女。

「まあ、何も事件がないという証拠だ」

そう言い返したのはデディマジン。奏のパートナーだ。
じりりりりりり！

「警報！？時間は？」

「1600年、関ヶ原だ！」

「歴史をひっくり返すのね…行くよ！」
扉が開き、光の方向へ二人は消えた。

【1600年関ヶ原】

「情勢はどうなっている？」

「はっ、今のところ東軍西軍互角であります！」

「そうか。下がって良い」

椅子に座り地図を見つめるのは徳川家康。

「申し上げます！」

「何事だ！？」

息を切らしてやって来た兵士。

「西軍側に、謎の妖怪が味方し、我が軍に多大な被害をもたらしています！刀、弓矢一切効果無し！」

「何だと！」

【戦場中心部】

「ぐあああああ！」

足軽の断末魔。それはモルイマジンによって起こされていた。

「ひやはは！歴史を書き換えてやる！」

東軍は逃げ腰だ。

「あ、いたいた。逃がさないよ」

その中に雰囲気合わない少女とイマジン。奏とテディのお出まし。

手にしていたバツクルを装着する。待機音が響く。

「変身」

『ストライクフォーム』

手にしていたパスを認識部分を通過させた。奏の体は装甲に包まれていき、仮面ライダーNEW電王ストライクフォームへ変身した。
「テディ」

その呼び声と共にテディはくるりと宙返りをして剣に変わり、NEW電王の手に収まる。

「それじゃ、行くよ！」

「お前に邪魔されてたまるか！」

マチエーテディ。テディが変化した姿。身の丈の2/3の長さだ。華麗な動きでイマジンを斬る。

「くそう！」

「テディ、10カウントで」

カウント。トドメをさす際にそのカウント以内に撃破する。それが彼女らのモットーだ。

「10...9...」

パスを再度認識部分にかざす。

『フルチャージ』

マチエーテディの刀身に電流が迸る。

「8...7...6...」

「てやあああつ！」

マチエーテディはモールイマジンを一刀両断にした。

「それじゃ、戻るよ」

指をパチン！と鳴らし、姿は消えた。

【桐原家】

「テディ、夕飯出来たよ」

「ありがとうございます。ではいただきます」

テディはイマジンだが人間の食べる食事も食べれる。

「今日も美味しいな。また腕をあげたな」

「うん、テディにそう言ってもらえると嬉しいよ」

メニューは若鶏の唐揚げと野菜炒め。

「片付けは私が」

「うん、ありがと。じゃあ私は寝るね…」

奏は二階の自室へ歩いていった。

「ふにゅ…」

ベッドに潜り込み、すやすやと寝息を立てる奏。机には写真が置いてあった。黒髪の少年と一緒に写っている奏。写真の隅にはこう書かれていた。

『幼なじみの二人』

彼女の幼なじみだった。

「弓弦…」

そう呟きながら彼女は寝ていた。

T i m e s o 1 〱 始まり 〱 (後書き)

遅めの更新ですがよろしく願います

Times 02 主要キャラ紹介 (前書き)

主要キャラはここに載せていきます。キャラの名前は、はい。アン
ジェルビーツから引っ張ってきました。名前だけです。本当に。

Times02 主要キャラ紹介

桐原奏 きりはら かなで

身長 161cm

髪型 ストレートの黒髪

本作品主人公。仮面ライダーNEW電王に変身する。優しい心の持ち主。かつては両親と三人暮らしだったが事故で両親は他界。とある経緯により仮面ライダーNEW電王になり、テディと知り合う。料理が得意で達人のテディをうならせるほど。趣味はバイオリン。自宅の警報機で時間の以上を感知、表示された時間に行ってイメージを倒すのがスタイル。若干小さめの胸にコンプレックスを抱いている。

モデルは「僕は友達が少ない」の三日月夜空。

テディイマジン

身長 172cm

奏のパートナー。戦う際には助言をしてサポートをしている。かなりの料理の腕前を持っており、奏に料理の指導もしばしば。

柏原弓弦 かしわら ゆづる

髪型 黒のショート

奏の机の写真に写っていた幼なじみ。仮面ライダー電王。

天野俊也 あまの としや

髪型 焦茶のショート

奏が転校した際に横の席になった同級生。女子から一目置かれており、人気がある。

T i m e s O 2 〱 主 要 キ ャ ラ 紹 介 〱 (後 書 き)

Times 〇3 奏の転入と過去 (前書き)

第三話です。どうぞ。

Times 03 奏の転入と過去

「学校？」

朝の食卓で奏はそんな声を出した。

「そうだ。奏も学校に通った方が良く考えた。今の時期に転入を受け付けている高校へ一年生としての受験申し込みは終わっている。一週間後にあるから、時間が空いたら受験勉強をしよう」

そう言ったのはテディ。奏のパートナーにして大切な家族。変身した際にはサポートを行う。

「うん、解った。でも、学校に通っているときにイメージが現れたらどうするの？」

「心配無用だ。これを作った」

そう言ってテディは奏の右腕に時計をはめた。

「これは？」

「それは一見普通の時計だが…言うよりも実践する方が良さだろう。その時計の右にあるスイッチを押してくれ」

そう言われて奏はスイッチを押した。

「何も変わってないけど？」

「いつも私を呼ぶ感じで指を鳴らすんだ」

奏はパチン！、と指を鳴らした。すると…？

「あれ、扉の前…」

奏は先程までリビングの椅子に座っていたのに、いつもイメージが現れた時にくぐる扉の前にいた。

「なるほど…そう言う事ね」

「ああ、これで学校にいても迅速に対応できる」

奏は一つ疑問に思い、テディに質問した。

「でも、授業中に消えたらどうするの？」

「ああ、戦いが終わったら元の時間、元の位置に戻る。だから安心して授業に打ち込める。使った際の他の人の違和感は戻った際に記

憶から消去される」

「ありがとう、テディ」

奏はテディにお礼をして食卓へ戻った。

「奏、合格おめでとう。今日から立派な高校生だ」

「うん、テディが教えてくれたからだよ」

ちなみにテディは変装術も得意。今は保護者の男性に変装している。名前は桐原良一郎。きりはらふよういちろう

「くすつ、テディ似合ってない」

「仕方ないだろう、私に青年の変装をやらせたからだ」

奏の要望で自分の兄、と言うことで保護者になって貰ったらしい。彼女の兄へのあこがれだろうか？

そんな話を話している間に学校へ着いた。

「すみません、本日よりここへ通うことになった桐原奏の保護者ですが…」

「あ、はい。承っております。面談室へどうぞ」

事務の人案内されて奏とテディは面談室へ入った。

「ようこそ。桐原奏さん。僕が担任の岸本勝だ。きしもとまさるこれからよろしく」

「桐原奏です。これからお世話になります」

「兄で保護者の桐原良一郎です。妹がお世話になります」

キンコンカンコンコン

「では、彼女は教室へ」

「はい。よろしく願います」

奏と勝はHRへ向かった。

教室へ向かう途中、勝は一つ奏に質問をした。

「ところで桐原のご両親は？」

「幼い頃に事故で亡くなりまして、今は兄が面倒を見てくれています」

「それはすまなかった。嫌な記憶を思い出させて」

「先生が謝る必要はありません。それよりも、つきましたよ？」

歩いている間に教室へ到着した。

「少しここで待っていてくれ」

勝は教室へ入った。

「今日は転入生を紹介するぞ」

「はい先生！男ですか、女ですか？」

一人の男子生徒が質問した。

「女の子だ。かなり可愛いぞ」

「うおおおおおおおおお！！」と教室から聞こえてくる声を余所に奏は少し紅くなっていた。

（私、可愛くないのに…）

「それじゃあ入ってきてくれ」

「は、はい！」

奏は教室の扉を開いた。そのまま勝の横に立つ。

「転入生の桐原奏さんだ。仲良くしてやってくれよ。それじゃあ簡

単に自己紹介を…」

奏は少し慌てていた。

（こついう時つて、作りでも良いから笑顔が良いのかな…？考えるより行動かもね…よし！）

「桐原奏です。これからよろしくお願いします」

とりあえず精一杯の笑顔で自己紹介をした。

「可愛い…」

「笑顔が素敵…」

「私、あの子に可愛くなる秘訣聞こうかな…」

奏はとりあえず安心した。悪い印象は無いと。

「桐原の席は…天野、お前の横で良いか？」

「はい、構いません」

奏はその席へ足を運ぶ。

「よろしく、私は桐原奏」

「こちらこそ、俺は天野俊也。解らないことがあつたら何でも聞いて」

「うん、ありがとう」

奏は無意識に微笑んだ。

（桐原さんって、可愛いな…近くで見ると尚更…／／／）

「どうかしたの？」

「ううん、何でもないよ」

放課後、俊也に食堂、授業で使う教室の場所等を教えて貰った。

「それじゃあ桐原さん、また明日」

「うん、天野君も帰り道気をつけてね」

二人の家は正反対。学校で別れるのだ。

「とりあえず、家まで走る…」

奏は小走りで下校を始めた。

（弓弦…）

奏は幼なじみの弓弦が忘れられないのだろうか？

「ただいま」

「お帰り。どうだった？」

「うん、みんな優しくて良かったよ」

奏は俯いたままだ。

「忘れられないのか？弓弦君の事が…。彼は恐らく…」

「それ以上言わないで！！！！！！」

奏は思わず声を張り上げてしまった。

「ごめんなさい、怒っちゃって…」

「いや、私が悪いんだ。今日の夕食は私が作るから部屋で出来るまで休んでいなさい」

「うん…ありがとう」

奏はゆつくりと部屋へ歩いていった。

奏の幼なじみ、柏原弓弦^{かしわら ゆづる}。中学一年までの幼なじみ。それ以降がない理由。それは彼が行方不明だからだ。

【三年前】

「奏、もうすぐ誕生日だな。何が欲しい？」

「んー、弓弦と一緒にの時間かな？」

弓弦はその言葉に赤面する。

「お、俺との時間？それで良いのか…／／？」

「うん、それが良いな」

彼女はすでに両親を亡くし、NEW電王として戦う日々だった。そんな中で弓弦との時間が幸せだった。

「おっし、奏の誕生日は一日中一緒だ！」

「うん！ありがとう、弓弦！」

奏の満面の笑み。今では見られない光景だ。そうだったのも、あの事件がきっかけだった。

「奏！後ろだ！」

「はあっ！」

マチエーテディを背後に振り、イマジンを斬る。

「おい弓弦！俺に交代しろ！」

「五月蠅いなモモタロス。解ったよ」

『SWORD FROM』

電王の体のパーツが青から赤へ変わる。

「俺、参上！」

電王Sはデンガッシャーをソードモードに切り替えて敵を斬る。変身しているのは弓弦だ。

「おらおらおらおら！どんどんきやがれ！」

猪突猛進の如くイマジンをなぎ倒す電王S。しかし…。

「ぐあああつ！」

何者かに攻撃されて吹っ飛ぶ電王S。

「弓弦！」

進路にいるイマジンを切り倒して電王Sの元へ向かうNEW電王。

「奏：気をつける…あいつは、強い！」

目の前に立っていたのはライダーだった。

「我が名は仮面ライダー^{ゲンガ}幻牙。貴様等イマジンを倒す愚か者を成敗する者だ」

「何が愚か者よ！時間を破壊するあんた達の方がよっぽど愚か者よ！」

NEW電王は反論する。

「貴様等に私を止める力があるのか？」

「俺達が力を合わせれば可能だ！」

「弓弦…」

電王Sは紅い携帯電話を取り出した。

「おい弓弦：解ったぜ。亀！熊公！小僧！行くぞ！」

『MOMO・URA・KIN・RYU』

電王Sがボタンを押す。

『CLIMAXFORM』

電王Sの体に紫、青、金の装甲が装着されて顔の複眼がスライドした。電王クライマックスフォームだ。

「俺達、参上！」

「ふん、ゴチャゴチャと…来い」

電王Cは幻牙に攻撃を仕掛ける。

「お前倒すけど良いよね！答えは聞いてない！」

デンガッシャーをガンモードに切り替えて銃撃を始めた。喋った

のはリュウタロス。銃撃が得意なイマジンだ。

「ふん、そんな弾丸が効くとでも？」

「はあっ！」

幻牙の隙について背後からNEW電王が斬りかかった。

「ぐあっ！くそっ…一筋縄ではいかないな…。では、これでどうだ！」

『スーパーチャージ
SUPERCHARGE』

「え！？フルチャージじゃない！？」

「ははははは！貴様等は今ここから発生するタイムホールに飲み込まれて消え失せるのだ！」

徐々にタイムホールが開き、吸い込む力が発生する。

「く……！」

NEW電王はマチエーディを地面に突き立てて踏ん張る。

「キンタロス、頼む！」

「おう、俺にまかしとき！」

『キンレグ
KINREG』

金色の装甲が足にスライドし、踏ん張る力を強める。喋ったのはキンタロス。怪力と情に厚いイマジンだ。よく寝る。

「きやつ…！」

NEW電王の踏ん張る力が徐々に弱くなる。

「くそっ…このままじゃ奏が…！みんな、俺のわがママをひとつだけ聞いてくれ」

「どうしたの弓弦。君らしくないね」

そう言ったのはウラタロス。釣り口説きが得意なイマジンだ。

「奏を…守るためなんだ…」

「へっ、お前らしいな。で、内容は？」

そう言ったのはモモタロス。激情一直線のイメージだ。
「それは…」

「何をゴチャゴチャと…大人しく飲まれて消えろ！」
「行くぞ！」

『フルチャージ
FULLCHARGE』

電王の足に電撃が纏われる。本作品オリジナル必殺技「俺達のライダーキック」だ。（命名モモタロス）

「弓弦!？」

「奏、俺が蹴りを入れてこれを止める！」

奏は予想外の行動に不安が隠せなかった。

「そんな事したら弓弦が…！」

「お前を助けるためだ！」

「嫌だよ！誕生日に…一緒に居てくれるって言ったじゃん！」

奏は仮面の下で泣いていた。

「もう時間がない！てやあああああつ…！」

電王Cはタイムホールへ飛び込んでいった。キックのエネルギーでホールは消滅した。

「弓弦うううううううううう…!!！」

「ふっ、今回は少年の行動に敬意を表そう。それに免じて手をここで引いてやる。彼に感謝するんだな」

幻牙はどこかへと消えていった…。

それから、奏は心の底から笑うことはなかった。笑みを浮かべることがあったとしても心のそこからではない。

「弓弦…」

布団に顔を埋め、奏は泣き出した。

Times03 奏の転入と過去 (後書き)

彼女の過去を少し明らかにしました。ご指摘などありましたらど
うぞお気軽に。

T i m e s 0 4 〱 奏の笑う時 〱 (前書き)

第4話、新フォーム登場です。

Times 04 奏の笑う時

「奏、奏。朝だ、起きるんだ」

「ん……。テディ、今日は土曜日だからもう少しだけ休ませて……」
奏は土日の朝になるとこの有様。平日の真面目さが台無しだ。

「駄目だ。例えば土曜日でも、早起きは当たり前だ。朝食が冷めてしまつから早く起きるんだ」

奏はゆっくりと体を起こす。典型的な寝ぼけた女の子だ。

「朝ご飯が冷めてしまつなら仕方ないわね……」

そう呟きながら食卓へと足を運んでいった。

「むにゃ……」

ドンゴンズテーン！！階段から寝ぼけて落つこちた音が桐原邸に響いた。

「痛い……」

朝食後、リビングのソファでそう呟く奏。

「あれは流石に痛いな。でも、日々戦ってきたから、少しアザが出来た程度で済んだんだ「うん……、そうね」

奏は紅茶を飲みながら納得した。

「そろそろね……」

「何かあるのか？」

奏は腕時計を見ながらそう呟いた。

「うん、学校の友達と……」

「男の子か？女の子か？」

保護者のテディとしては心配だ。

「もう、聞かないでよ……／＼／＼」

奏が珍しく頬を赤く染めた。テディは確信した。男の子だな。相手は。そういえば服の雰囲気も違う。

「奏。少ないが、これを……」

テディの手には千円札が一枚、五百円玉が一枚。

「いいの？」

「ああ。日頃あまり遊んでないからな。私からの小遣いだ」
奏の表情が少し明るくなる。

「ありがとう、デディ」

ピンポン！

「それじゃ、行ってくるね」

「ああ。気をつけるんだぞ」

奏は元気よく出ていった。出ていった後にデディは気付いた。

（奏があんなに笑うのは久しぶりだ…。相手の男の子が良い刺激を与えてくれたのか？）

「お待ちませ天野君」

「いや、そんなに待ってないよ」

奏のコーデは水色を基調とした大人らしい格好だ。

「その服、似合ってるね」

「え、本当に？ありがとう」

にこつ、と微笑む奏。それにドキッ、となる俊也。

二人は打ち合わせ通りに市街へ出掛けていった。

「天野君の趣味はどんなの？」

「ああ、ガン ラとかかな」

俊也の趣味はガ プラらしい。

「私はね」

そこで言葉が遮られた。

「そこのお嬢ちゃん、そんな弱そうな男と一緒にいないで俺達と遊ぼうぜ」

「何…あんだ達…」

不良が絡んできた。奏は不快そうな表情を浮かべる。それを言い意味で捉えたのか、彼らは奏の腕を掴む。

「きゃっ！！！」

電王として戦うが女の子。同年齢の女子よりは身体能力は上だが力はそこまでない。

「さあさあ……痛ででででで……！」

不良が悲鳴を上げた。それは、俊也が不良の腕を捻っているからだ。

「女の子にそういう事する奴は嫌われるぜ。よせよ」

「何だ……！」

不良は途中で口を閉じた。向こう側から警官がパトロールにやって来たからだ。まだ見つかってないことを良いことに一目散に逃げ出した。

「あの……ありがと。助けてくれて」

「いや、いいよ。女の子にあんな事をする奴は許せないから」

奏は重ねていた。俊也を 弓弦に。

（何か、格好いいな……／＼惚れちゃいそう……って何を考えてるのかしら……！）

その後も二人はゲームセンターに行ったり映画を見たりと充実した時間を過ごした。

「次はどこに行く？」

「えーっとね……「きゃああああ……！」

女性の悲鳴が聞こえた。一体何があったのだろう。奏は俊也を連れて走り出した。

（あ……俺、桐原さんと手つないでる……暖かいな……／＼）

現場ではイマジンがOLの女性を襲っていた。

「天野君、下がって！」

奏はNEW電王のベルトを装着した。洗練された待機音が響く。
「変身」

手にしていたパスを認識部分にかざした。

『ストライクフォーム』

奏の体に装甲が装着され、仮面ライダーNEW電王ストライクフォームに変身した。

「デディ」

指をパチンと鳴らし、マチエーデディを呼び出した。

「デディ、どうなってるの!？」

「私にも分からない。ただ、何かが起こり始めているのは確かだ」
「何かが起こり始めている。それは一体…。」

「あの桐原さん？」

「あ。ごめんなさい天野君。少し待っててね」

NEW電王はイメージンを斬りつける。その剣裁きは華麗の一言だ。
「剣の腕が確かでも、効いてなければ意味がないぜ!」

その敵 エレファントイメージンは拳でNEW電王を殴る。

「くっ…!!」

「桐原さん!後ろ!」

その言葉通り後ろを振り返る。後ろからイメージンがもう一体やってきた。タツクルを喰らわされ、吹っ飛ぶNEW電王。

「ありがと…天野君…痛っ!!」

「奏!むう…どうする…」

追いつめられたNEW電王。

「諦めるしか…駄目だ!!」…え…?

俊也が口を挟んだ。

「諦めるなんて、最後までやってみなくちゃ分からないだろ!」

「天野君…うん。ありがとう」

NEW電王はゆっくりと立ち上がった。

「私、最後まで諦めないからね。覚悟しなさい、あなた達」

「では奏。一つ成長したお祝いだ。ベルトの赤いボタンを押してくれ」

NEW電王は赤いボタンを押した。ラスボス出現の様な待機音が響く。

「デディ!俺の出番か!」

「ああ、頼むぞ！」

『アサルトフォーム』

体の装甲が変化し始めた。赤を基調とした装甲に変化した。仮面ライダーNEW電王アサルトフォームにフォームチェンジが完了した。（今後NEW電王A）

「貴方は…？」

「俺はラーゲ。テディの友達だ。お前さんの味方だぜ！俺のパワーならあいつらの堅い装甲も突破できるからな！」

NEW電王Aは両腰のアサルトライフルを構えてイマジンを撃った。効果はかなりの様だ。

「凄い…」

「だろ！」

ラーゲはひゅつと現れて2本の近接ブレード「アサルトラーゲ」に変化した。

「使ってみな！テディほどのリーチは無いけど、思いっきり近づいて使えば強いぜ！」

「うん、やってみる！」

アサルトラーゲを構えてイマジンに向かって走る。

「こいつ、急に強くなりやがった！」

「はああああ！」

すれ違いざまに斬りつけた。ラーゲの言うとおりだ。

『フルチャージ』

アサルトラーゲにエネルギーがチャージされていく。2本をそれぞれのイマジンに投げつける。それは体に刺さる。

「はああああー！」

それに向けてアサルトライフルを撃った。命中した弾はアサルトラーゲにエネルギーとして蓄積される。刺さっていたのを全力で引

き抜く。相手は断末魔をあげながら消えていった。

「つまり、桐原さんは、このテディ、そしてさっき仲間になったラーゲと一緒に、時間の破壊を目論むイマジン達を倒す時の守護者、って事だね」

「君は飲み込みが早いな」

桐原家で説明を受けた俊也。

「桐原さん、俺も何か力になりたいよ」

「これは、私みたいに变身できる力がないと、無理よ。気持ちは嬉しいけど……」

俊也は思った。女の子、しかもまだ未成年の彼女が一人で時間を守っているなんて。

「俺が、何か变身できる道具が無いか知り合いに探させてみる」

「本当か！？お願いするよ、ラーゲ！」

「おう！任せとけ！」

時計を見ると時間は午後12時を指していた。

「お昼、ウチで食べていく？」

「あ…うん。お願いするよ」

奏は台所へ昼食の準備に向かった。

「俊也君」

「テディ？」

テディが俊也を呼んだ。

「君にお礼が言いたい。奏があそこまで明るい表情を見せたのは転入してからだ。君のおかげであの子は明るくなった。これからも奏と仲良くしてやってくれ」

「あ、はい。了解です」

テディから直々のお願いだった。

「天野君、出来たよ」

食卓には奏の作った料理がずらり。

「いただきます」

俊也はまずみそ汁を啜った。

「どう…?」

「優しい味だね…。凄く美味しいよ」

その言葉に嬉しくなる奏。

「良かった。喜んでもらえて嬉しい」

「おっ、これも美味しい…!」

奏の料理をとても気に入ったようだ。

「俊也君、奏をよろしく頼む!」

「へっ!?!ちよ…: ティーノノノノノ!?!」

ティーはそういう意味(結婚相手とか)で言ったわけではない。
仲良くしてやってくれ、の意味だ。

「あ、はい。分かりました」

「天野君もノノノノノノノノノノ!!!!」

T i m e s 0 4 奏の笑う時 (後書き)

アサルトフォーム、如何でしたか？感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8049z/>

仮面ライダーNEW電王～全ての時の守護者～

2011年12月31日17時46分発行